
ラブライブ！サンシャイン！！記憶喪失のライダー
装甲響鬼

暁～小説投稿サイト～ By 肥前のポチ

<http://www.akatsuki-novels.com/>

注意事項

このPDFファイルは「暁く小説投稿サイトく」で掲載中の小説を「暁く小説投稿サイトく」のシステムが自動的にPDF化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「暁く小説投稿サイトく」を運営する肥前のポチに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラブライブ！サンシャイン！！記憶喪失のライダー

【作者名】

装甲響鬼

【あらすじ】

主人公桐生戦兎は学校の帰り道謎の組織に体を改造され片手から造り出されたビルドドライバーを持って逃げ出した。

そして記憶を喪いある家の前で倒れていた。

そしてそれから4年の月日が流れて桐生戦兎は仮面ライダービルドとして街の平和を守るために戦い始めた。

彼を待つのは絶望かそれとも希望か。

「さあ、実験を始めよう！」

この物語に登場する桐生戦兎は名前は同じで顔も同じだが全くの別人です。

プロローグ

ある一人の青年が謎の組織追われていた。

彼は捕まり実験場で体に何か実験をされ始めた。

彼は苦しみの中で片手に何かを作り出した。

それはベルトの様な物だった。

「うあああああ！」

青年は我を忘れて2本のボトルの様な物をベルトに差し込んだ。

「ラビット&タンク！ベストマッチ！イエーイ！鋼のムーンサルト！
ラビット&タンク！」

青年は見たこともない戦士に変身した。

敵の戦闘員達は青年に攻撃を仕掛けたが戦うレベルに差があり相手にならなかった。

その研究所を破壊した戦士はふらつきながらただ歩いていた。

訳もわからず。

――？――

青年は変身が解けて門の前で倒れてしまった。

彼が次に目を覚ますのはいつだろう。

第1話 実験

┆黒澤家┆

赤い髪の少女が大きな屋敷で誰かを探していた。

「あっ！お姉ちゃん！戦兔さん見なかったな？」

少女の名は黒澤ルビィ引っ込み思案で臆病な少女である。

「戦兔さんですか？戦兔さんなら自室に居るんじゃないやありませんの？」

そう姉の黒澤ダイヤはルビィに言った。

「そっか！ありがとうとお姉ちゃん」

ルビィはそう言って走り出した。

┆戦兔の部屋┆

一人の青年がクリアパネルに何かを書いていた。

それは大学や高校で習う問題よりも難しそうな数式だった。

「戦兎さーん！」

ルビィは戦兎の部屋に入り声を掛けた。

「よう！ルビィどうしたんだ？」

彼の名は桐生戦兎。

黒澤家に厄介になっている居候だ。

「あの、この制服どうですか？」

ルビィは戦兎に自分の通う制服を見せた。

「おお、可愛いな！よく似合ってるぜ！やっぱりダイヤが着るよりルビィみたいな子が着ると可愛さが増すな」

戦兎はそうルビィに言った。

「そ、そんなことは／＼／＼」

ルビィは顔を赤らめて言った。

「とりあえず話はそれだけか？」

戦兔はそうルビィに聞いた。

「えっと、戦兔さん今から・・・私と・・・」

ルビィはモジモジしながら戦兔に何かを言おうとした。

「買い物か？なら付き合おうぜ」

戦兔はそうルビィに聞いた。

「あっ、はい。そうです」

ルビィはそう頷いた。

「わかった、準備するから待っていてくれ」

戦兔はそうルビィに言った。

「うん！」

ルビィは笑顔で領き部屋を出て行った。

戦兔はリュックにビルドドライバーとフルボトルを入れて部屋から出た。

┆ 沼津の街 ┆

戦兔はルビィと一緒に歩きながら買い物を楽しんでいた。

「ルビィは何か買うものがあるのか？」

戦兔はルビィに聞いた。

「うくん、あっ！今日スクールアイドルの雑誌の発売日なんだった！」

ルビィはそう戦兔に言った。

「なら本屋だな」

そう言って戦兔は本屋に向かった。

十本屋ブックリント

本屋に入り戦兔は本を読みふとルビィを探した。

ルビィはアイドル雑誌コーナーでスクールアイドルの雑誌を読んでいた。

「ルビィ？買う本決まったか？」

戦兔はルビィに聞いた。

「うん！」

ルビィは笑顔で頷きスクールアイドルの雑誌を持って走り出した。

「やれやれ」

戦兔はルビィの後を追い掛けた。

十ケーキ屋・サンモルテト

ルビィは戦兔の奢りでチーズケーキを食べていた。

「美味いか？ルビィ？」

戦兔はルビィに聞いた。

「うん！」

ルビィは笑顔でそう言った。

戦兔はエスプレッソを飲みながら空を見ていた。

「あの、戦兔さん一口食べますか？」

ルビィは戦兔にそう聞いた。

「えっ？」

戦兔はルビィの一言に固まった。

「やっぱり嫌ですか？」

ルビィはそう戦兔に聞いた。

「いや、嫌じゃないが」

そう戦兔は言った。

「はい」

ルビィはチーズケーキを一口サイズにして戦兔の口に運んだ。

戦兔はされるがままにチーズケーキを食べた。

「美味しいな」

戦兔はそうルビィに言った。

「ですよね／＼／＼／＼」

ルビィは顔が赤くなりながら頷いた。

「あれ？ルビィちゃん？」

後ろからルビィの名前を呼ぶ少女が立っていた。

「あっ！花丸ちゃん」

ルビィはイスから立ち上がり花丸に近づいた。

「何してるずら？」

花丸と呼ばれる少女はルビィと戦兎を見て何かを察した。

「デートしてたずらか？」

そう花丸はルビィに小声で聞いた。

「ピギィ！ち、違うよ！」

そうルビィは花丸に言った。

「そうずらか」

花丸はルビィの隣に座り戦兎をじっと見た。

「うん！」

ルビィは花丸と話をしていた。

戦兎は空を見ながら片手にフルボトルを持ちながらただ時が過ぎるのを待った。

ト？ト

海に近いダイビングショップで働く少女松浦果南は海をジェットスキーで飛ばしていた。

「うーん！いい天気だね」

そう言って果南は岸に上がり砂浜に向かって歩き始めた。

「あれ？」

果南は何かを見つけた。

それは男性だった。

「大丈夫ですか？」

そう果南は男性を揺すった。

「うっ！は・・・」

男性は何かを言おうとした。

「は？」

「腹へった〜」

そう男性は言った。

「えっ？」

果南はとりあえずほっとけなかつたのか男性を背負い運び始めた。

┆松浦家┆

果南はキッチンで料理を作り始めた。

「よし！」

果南は焼きそばとカレーライスを男性の前に出した。

「飯！」

男性は目が覚めたのか目の前の食事をじっと見た。

「食べて構いませんよ。昨日の残りだから」

そう果南は男性に言った。

「悪いな！いただきます！」

バクバクバク！

男性は焼きそばとカレーライスをガツガツと食べながら食べ終えた。

「ごちそうさん！」

そう男性は果南に頭を下げて言った。

「お粗末様」

果南はそう男性に言った。

「ところで、貴方はあんな場所でどうして倒れてたの？」

果南はそう男性に聞いた。

「ああ、会社をクビになっていく宛も無くこの砂浜を歩いていたら空腹で倒れちゃったんだ」

男性はそう果南に説明した。

「そうなんだ」

果南はそう男性をじっと見た。

「自己紹介がまだだな俺は万丈龍我だ」

龍我はそう果南に自己紹介をした。

「私は松浦果南よろしくね万丈さん」

そう果南は龍我に頭を下げた。

「敬語なんてやめてくれよ！背中が痒くなる」

龍我はそう果南に言った。

「なら、龍我」

果南はそう龍我を呼び捨てで呼んだ。

「おう！その方がしっくり来る！」

龍我はそう言った。

「すみませーん！」

店から客の声が聞こえた果南はレジに向かった。

「はーい！」

龍我は食べ終えた皿を洗い始めた。

十夜の沼津卜

「ふんふん♪♪」

鼻歌を歌いながら二人の少女が歩いていた。

オレンジ色の髪の少女高海千歌と銀に近い髪の少女渡辺曜は東京から帰って来て受かれながらμ・sと呼ばれる伝説のスクールアイドルの話をしていた。

「ねえ、曜ちゃんならやっぱりことりさんに似てるよね？」

千歌はそう曜をポスターに写るμ・sの一人のことりと呼ばれる少女と見比べ始めた。

「あのね、千歌ちゃん」

「ん？何？」

「私とそのことりさん全然似てないと思うよ」

曜はそう千歌に言った。

「えく！そうかな？」

千歌はそう言って曜とポスターの人物を見比べた。

その時。

「千歌ちゃん！前！」

「えっ？」

千歌の目の前にトゲトゲの怪物がゆっくりと千歌に近づいて来ていた。

「千歌ちゃん何あれ？」

「わかんないけど怖いよ」

二人は恐怖のあまり動く事が出来なかった。

「グルルルル！」

ニードルスマッシュはゆっくりと二人に近づいて来ていた。

「うらあ！」

いきなり誰かがニードルスマッシュに飛び蹴りを打ち込み千歌と曜の前に立った。

「さあ！実験を始めるか」

「ラビット&タンク！ベストマッチ！鋼のムーンサルトラビット&タンク！イエーイ！」

男性は仮面ライダービルドラビットタンクフォームに変身した。

「いくぜ！」

仮面ライダービルドLTは専用武器ドリルクラッシュャーを片手に持ち攻撃を仕掛けた。

「うらあ！」

ザッシュザッシュュ！

一撃二撃三撃と斬りまくりビルドはベルトのレバーを回し必殺技を発動した。

「ready go」

ビルドは必殺キック。

ボルテイクフィニッシュをニードルスマッシュのボディに打ち込んだ。

「ぐああああ！」

ドゴーン。

ニードルスマッシュの体が爆発してビルドは片手に空のフルボトルでニードルスマッシュの成分を採取した。

「おい！あんたら大丈夫か？」

ビルドはそう曜と千歌に聞いた。

「えっと？あっ、はい」

曜はそう言った。

「そうか、もう遅いから気を付けて帰れよ」

そう言ってビルドは高くジャンプしてその場から消えた。

「沼津に現れたHERO！」

千歌はそう目をキラキラさせながら言った。

「千歌ちゃん？」

曜は千歌の目を見てどうしたものか悩んでいた。

┆黒澤家┆

戦兎は家に帰って来てニードルスマッシュの成分でフルボトルを作り出す準備をしていた。

「戦兎さん今日は私がフルボトルを作りますわ」

そう言ったのはルビィの姉のダイヤだった。

「ああ、10分で出来るよな？」

戦兎はそうダイヤに聞いた。

「余裕ですわ」

そう言ってダイヤはカプセルに入りフルボトルを持って中に閉じこもった。

戦兎はダイヤが持って来た差し入れの焼おにぎりを食べながらダイヤが出るのを待った。

く づ っ

第2話 不思議な物理の先生

十 黒澤家ト

戦兎は黒いスーツに着替えて片手にカバンを持ち部屋から出てきた。

「あら、戦兎さんおはようございます」

そうダイヤとルビィの母親は戦兎に挨拶した。

「おはようございます」

戦兎はそう言ってキッチンで白米と焼き鮭と味噌汁と漬け物を食べながらルビィの席を見た。

ルビィが起きた形跡がないことからルビィはまだ寝ているみたいだ。

「戦兎さんすみませんけどルビィを起こしてきてくれませんか？」

そうルビィの母親は戦兎に言った。

「はい、構いませんよ」

戦兎はそう言ってルビィを起こしに向かった。

┆ルビィの部屋┆

「スースー」

ルビィは静かに寢息立てていた。

「おい！ルビィ起きろ！朝だぞ！」

戦兎はそうルビィの体を揺すりながら言った。

「ふにゃあふにゃあ」

ルビィはまだ夢の中から起きそうになかった。

「ルビィ！！！！！！」

大声で戦兎はルビィの名前を言った。

「ピギィ！」

ルビィは勢いよく起きた。

「ほら、今日から入学式だろ？」

戦兎はそうルビィに言った。

「あれ？」

ルビィはようやく目が覚めたのか起き上がって急いで支度をした。

十 黒澤家の門の前ト

「ヤバイな、これじゃあバスには間に合わないな」

戦兎はそう言った。

「ど、ど、ど、どうしよう！」

戦兎は仕方なさそうな顔をしていた。

「これを使うか」

そう言って戦兎はポケットからスマホの様な電子機器を取り出した。

更にポケットからライオンの模様が描かれたフルボトルを片手に持ちながらそれを装填した。

「えっ？何でスマホがバイクに？」

ルビィはそう戦兎に聞いた。

「ほら、乗れ！」

そう言って戦兎はルビィにヘルメットを渡した。

「う、うん！」

ルビィは戦兎の後ろに乗り走り始めた。

――浦の星女学院――

戦兎はヘルメットを外してルビィを見送り自分も職場に向かった。

「おはようございます」

そう言って戦兎は職員室に入った。

「おお、君が桐生戦兎くんか？」

そう教頭らしい先生が戦兎に聞いてきた。

「はい！よろしく願います」

戦兎はそう言って頭を下げた。

「――昼休み――」

戦兔は片手に缶コーヒーを飲みながら海を見ていた。

「あっ！戦兔さん！」

戦兔の名前を呼んだのはルビィだった。

「よう、入学式は終わったみたいだな」

戦兔はルビィにそう言った。

「うん！今から花丸ちゃんと一緒に帰りますから」

ルビィは戦兔に笑顔で言った。

「気をつけて帰ろよ」

戦兔はそうルビィに言った。

「はい！」

ルビィはそう言って走り出した。

「相変わらずわからない奴だな」

戦兔はそう言って歩き始めた。

――職員室――

「あの、桐生先生」

女子生徒が戦兔に話し掛けた。

「どうした？」

戦兔はそう女子生徒に聞いた。

「あの、これを見てほしいんですけど」

女子生徒は片手に何かの勧誘のチラシを見せた。

そこには「スクールアイドル部&仮面ライダー部」と書かれていた。

「誰が配ってたんだ？」

戦兔はそう女子生徒に聞いた。

「えっと、2年生の高海千歌です」

そう女子生徒は言った。

――生徒会室――

「何故うちの高校で仮面ライダー部やスクールアイドル部があるんですか？」

そうダイヤは千歌に聞いた。

「えっと、人気があるスクールアイドルとこの内浦に現れた仮面ライダーを部活にしようと思って！」

千歌はそうダイヤに言った。

「あなた、訳のわからない部活は許されせんわ！」
ダイヤはそう千歌に近づき言った。

「で、でも」

千歌はそれでも意見を言おうとした。

「仮面ライダーが何なのかあなたにわかりますか？」
ダイヤはそう一人の身内を思いながら言った。

――黒澤家――

ルビィは片手にスクールアイドルの本を読みながら戦兔が帰って来るのを待っていた。

「戦兔さん遅いなく」

ルビィはそう言って外を見ていた。

「ただいま」

そう男性の声が聞こえてルビィは走り出した。

――玄関――

「戦兔さんお帰りなさい！」

ルビィはそう言って戦兔のカバンを持った。

「おう！ただいま」

そう言って戦兔は片手に何かを持っていた。

「何ですか？それ？」

ルビィはそう戦兎に聞いた。

「ああ、ダイヤとルビィにお土産」
そう言って戦兎は台所に向かった。

「――台所――」

ルビィは戦兎が何を買ったのか気になっていた。

「中見るか？」

戦兎はそう言って中身を見せた。

「うわぁ！」

ルビィは目をキラキラさせながら中身を見た。

「イチゴチョコケーキ。二個だ！お前とダイヤには世話になってるからな」

そう言って戦兎はケーキを冷蔵庫に入れた。

「――ダイビングショップ――」

「ごめんね、龍我」

そう言って果南は龍我に言った。

「気にすんな！体力と筋肉には自信があるからよ！」

龍我はそう言って空になった酸素ボンベを担いで歩いていた。

「それにしても龍我ってダイビングの免許とクルーザーの免許も持ってたんだね」

そう果南は龍我に言った。

「ああ、親にいろんな免許取らせられてな」

そう言って龍我はボンベを下ろして体を動かしながら辺りを見た。

「あれ？千歌？」

果南は幼馴染みの千歌を見て歩き始めた。

「果南ちゃんこれお裾分けと回覧板」

そう言って千歌は回覧板を果南に渡した。

「またみかんでしょ！」

果南はそう千歌に言った。

「文句ならお母さんに言ってよ！」

千歌はそう言って果南の後ろで働く龍我を見た。

「ねえ、あの人誰？」

千歌はそう果南に聞いた。

「ああ、あの人はずちのバイトの」

「バイトじゃねえよ！万丈龍我だ！」

龍我はそう言ってボンベを片手に持ちながら千歌と曜に頭を下げて挨拶した。

「万丈龍我さんって大学生ですか？」

千歌はそう龍我に聞いた。

「いや、元サラリーマンだ」

そう言って龍我は他の道具を見ていた。

「それより、話はそれだけ？」

果南はそう千歌に聞いた。

「ううん、果南ちゃんいつになったら浦女に戻って来るかなって」

そう千歌は果南に聞いた。

「うーん、バイトが居たら助かるけど。」

そう言って龍我を見た。

「なら、俺が代わりにこの店やってやるよ！」

龍我は片手を前に出して言った。

「えっ？龍我いいの？」

そう果南は龍我に聞いた。

「おう！世話になってるしな」

そう龍我は片手を前に出してボクサースタイルで言った。

「やったね！果南ちゃん」

千歌はそう果南に言った。

「そうしたいけど、いいの？」

果南は龍我を見た。

「気にすんな。昔からこういうのは慣れてる！」

そう言って龍我はウエットスーツを脱ぎ筋肉を鍛えはじめた。

「だって」

果南は龍我に微笑みながら少し好意を抱いていた。

ズンッ。

何かが四人の前に現れた。

それは。

「千歌ちゃん。あ、あれ！」

そう曜はそれを指差した。

それはスマッシュだった。

「何だよあれ！？」

龍我はそう言って3人の前に立ってボクサースタイルでスマッシュに攻撃を仕掛けた。

「うらぁ！」

スマッシュのボディに重い一撃が打たれたがスマッシュは龍我の攻撃が全く効いていなかった。

「何で効かないんだよ！」

龍我はそう言って攻撃を繰り出したが全く効いていなかった。

「果南！ダチ連れて早く逃げろ！」

龍我はそう言ってスマッシュを動きを止めようとしながら時間を稼いでいた。

「龍我！」

果南は龍我の戦いを見て自分達の為に戦う龍我を助けたいと胸の中で思っていた。

「俺は負ける気がしねえ！」

すると龍我の片手が光はじめた。

「……？……」

龍我は目を開けるとそこには自分と同じ姿の自分が立っていた。

「誰だよ！お前！」

龍我は自分に聞いた。

「俺はお前だよ！」

そう言って龍我は龍我にビルドドライバーとクローズドラゴンとドラゴンフルボトルを龍我に渡した。

「お前は大切な者を守れ！俺みたいになるなよ！」

そう言ってもう1人の龍我は片手を拳にして去った。

「……浜辺……」

「やってやるよ！」

龍我はそう言ってクローズドラゴンとドラゴンフルボトルをビルドドライバーに差し込んだ。

『ウェイクアップ！』

『クローズドラゴン！』

『Are you ready?』

「変身！」

『Wake up burning! Get CROSS-Z

DRAGON!』

『Yeah!』

「今の俺は負ける気がしねえ！」

そう言って仮面ライダークローズは片手を拳にして言った。

「うらあ！」

クローズはパンチを5発連続で打ち込みそのままビルドドライバーから専用武器ビートクローザーを出現させた。

「いくぜ！」

クローズはビートクローザーで連続で切り続けた。

一撃二撃と斬りまくりグリップを三回引っ張り必殺技「メガヒット」を発動した。

黄色い斬撃がスマッシュに直撃した。

「決めるぜ！」

「ボルテックフィニッシュ！」

クローズは必殺技ドラゴニックフィニッシュをスマッシュの頭に打ち込んだ。

スマッシュは10m吹き飛び爆発した。

クローズは片手に何かを持っていた。

それは空のボトルだった。

「何で俺これ持ってんだ？」

そう言ってクローズはボトルの先をスマッシュに向けた。

その瞬間スマッシュは人に戻りクローズの手にはボトルがあった。

「龍我！」

果南は龍我に向かって走り出した。

「無事かお前ら？」

龍我はそう3人に聞いた。

「うん！ありがとう龍我」

果南はそう言って龍我に頭を下げた。

「ふう」

「――寺――」

片手に鍬を持ちながら畑を耕す男性四人が居た。

「皆！ごはんできましたぞら！」

そうルビィの親友の花丸は四人の男性に言った。

「頭いきますよ！」

そう3人の男性は20代後半の男性に言った。

「ああ、わかってるよ」

茶髪の男性は花丸を見て少し笑いながら歩き出した。

続く

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
http://www.akatsuki-novels.com/stories/index/novel_id~20431

ラブライブ！サンシャイン！！記憶喪失のライダー
2019年02月03日 23時52分発行